

ツチクジラ 太平洋・日本海・オホーツク海

Baird's Beaked Whale, *Berardius bairdii*



管理・関係機関

農林水産省

最近一年間の動き

2012 年は、年間 66 頭の捕獲枠に、昨年の捕り残し分（太平洋側 5 頭）の繰越し枠を加え、71 頭の捕獲枠のもとに操業が行われ、全頭数 71 頭を捕獲して操業を終了した。また第 64 回国際捕鯨委員会（IWC）科学委員会の小型鯨類分科会において、本種を含むアカボウクジラ科鯨類の既存知見についてレビューが行われた。

漁業の特徴

捕獲は少なくとも 17 世紀に遡り、明治時代初頭まで千葉県勝山沖等で手投げ鉾で捕獲されていた。戦後、小型捕鯨業の捕獲が急増し漁場も千葉県周辺から三陸、北海道、日本海沿岸まで広がった。本種は体長 10 m に達する歯鯨類だが IWC の管轄外種で、商業捕鯨モラトリアム以降も、我が国の自主管理のもと沿岸域で商業捕獲が継続している。現在の商業捕獲は大臣許可漁業の小型捕鯨業のみで、全国 4 か所（千葉県和田浦、宮城県鮎川、北海道網走、函館）の捕鯨基地で水揚げ・解体・処理されている。

生物学的特性

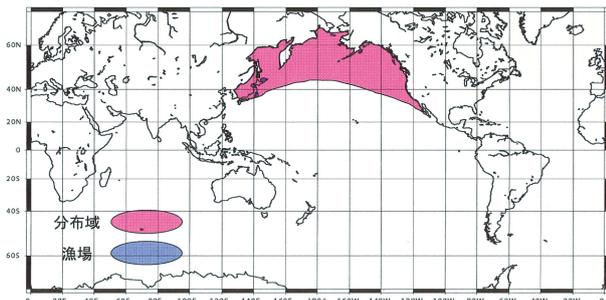
- 寿命：雄 84 歳、雌 54 歳（捕獲物の最高年齢）
- 成熟開始年齢：雄 6～11 歳、雌 10～15 歳
- 交尾期・出産期：10～11 月・3～4 月
- 繁殖場：調査中
- 索餌期・索餌場：周年・房総、常磐沖ほか
- 食性：魚類、頭足類
- 捕食者：シャチ

漁業資源の動向

太平洋側沿岸の捕獲が主体であり 1950～1970 年代初頭にかけて年間百頭を超える捕獲がなされた（自由操業）。1983 年に自主規制枠、1990 年に捕獲枠が導入され、1999 年以降は、年間捕獲枠 62 頭（太平洋沿岸+オホーツク海 54 頭、日本海 8 頭）が設置されてきた。2005 年に枠の見直しがなされ、系群ごとに太平洋 52 頭、オホーツク海 4 頭、日本海 10 頭、計 66 頭の捕獲枠が設置された。

利用・用途

肉は房総半島周辺でタレと呼ばれる乾肉、他の地域では、生鮮肉、缶詰加工用肉など。脂皮は汁物。



ツチクジラの分布図

日本周辺におけるツチクジラの分布と漁場及び水揚地

資源状態

資源量の推定値は太平洋沿岸（北海道～相模湾）：5,000頭（95%信頼区間 2,500～10,000頭：1991～1992年）、日本海東部：1,500頭（同 370～2,600頭：1983～1989年）、オホーツク海南部：660頭（同 310～1,000頭：1983～1989年）である。IWCの管轄外種のため、資源状態に関する国際合意はない。1970年以前の捕獲が初期資源に与えた影響は明らかでなく（過去の統計は別種の混在の可能性もある）、各系群の大きさが5,000頭以下と小さく、分布範囲も限られており、資源水準は「中位」とみなすのが妥当であろう。捕獲物組成の動向には、資源の増減の兆候はなく、資源動向は「横ばい」と考えられる。

資源評価まとめ

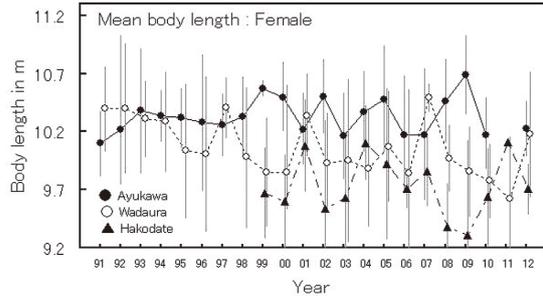
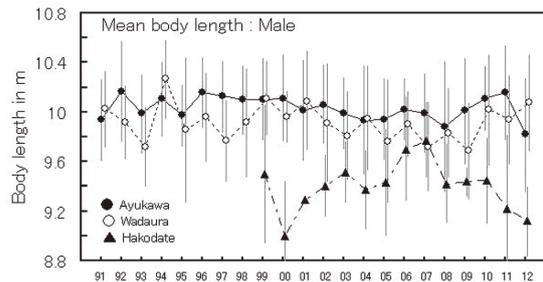
- 資源水準は中位、資源動向は横ばい
- 1980～1990年代の資源量推定値が最新なので、目視調査を継続し推定値の更新が必要

資源管理方策まとめ

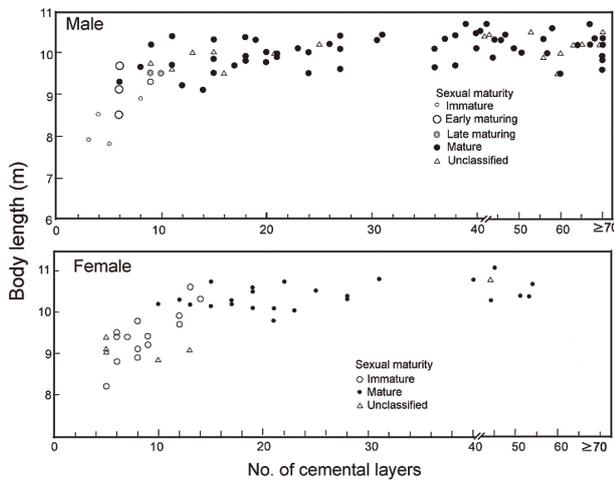
- 現在は推定資源量の約1%を目安に捕獲枠を設定し捕獲物組成の動向をモニタリング
- 将来的には、歯鯨類を対象とした資源管理モデルを開発し適用することが必要

管理方策

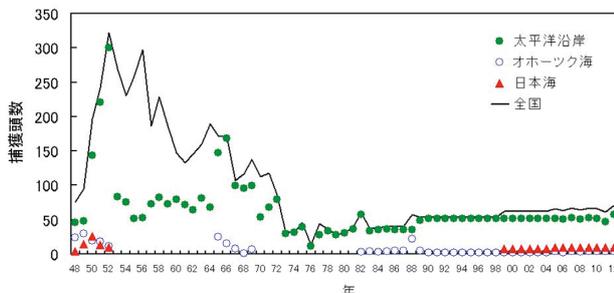
IWC 科学委員会はひげ鯨類を対象の新たな資源管理モデル（改訂管理方式 RMP）を開発したが、社会構造が複雑な歯鯨類には適用できない。このため、専門家らの合意に基づき、推定資源量の約1%を目安に、行政的側面も勘案しつつ水産庁が捕獲枠を設定している。その他、農林水産大臣の許可漁業として、海域ごとに、操業隻数（5隻）、水揚げ地を定めている。



平均体長の経年変化（木白 未発表データより）



体長と年齢の関係（Kasuya et al. 1997 より）



ツチクジラ捕獲頭数の経年変化

（1948～1993年は粕谷（1995）、1994～2012年は国際水産資源研究所データより作成）

ツチクジラ（太平洋・日本海・オホーツク海）の資源の現況（要約表）

資源水準	中位
資源動向	横ばい
世界の捕獲量（最近5年間）	なし
我が国の捕獲量（最近5年間）	61～71頭 平均：65.8頭 （2008～2012年）